若き竜王に求愛されて番の花嫁になりました

ゼジニアの白い揺籠

Characters

アウファト・クイレム

愛称アウ。王立研究所の
史学科首席研究員。
「白い柩」と呼ばれる遺跡で
ジェジーニアを見つける。
ジェジーニアのことは慈しんでいるが、
自身の心の機微にやや疎い。

シエナ

王立研究所所属の研究員。
アウファトの助手。

ミシュア

先代の王立研究所の
史学科首席研究員。
アウファトとは師弟であり昔馴染み。

ジェジーニア

愛称ジジ。
「黒き竜王」トルヴァディアの
息子である竜人。
「白い柩」で千年ほど眠っていたらしく
時折少年じみた言動をする。
アウファトに対して出会った時から
まっすぐに好意を向けている。

フィノイクス

「代行者」と名乗る、
ジェジーニアの過去を知る存在。

ウィルマルト・ティスタリオ

竜人の都市エンダールの領主。
アウファトの研究の協力者。

男の目の前には壁があった。闇の中でもうっすらと光を放つような、白い石でできた壁だ。男が生まれるずっと前、まだこの国が神のしもべである竜王に守られていた、後に神代と呼ばれる頃に作られたものだ。

男の左手で輝くランタンの光が照らすのは、壁に刻まれた幾何学模様のような文字だった。神代に使われていた文字。男の生きる今の時代には使われていない、いわゆる古代文字だ。

男の右手が壁に触れ、痩せた指先が文字をなぞる。

「アウファト、わかったか」

背後から響く芯のある男の声に、壁の文字を凝視する男――アウファトは首を振った。肩にかかるくらいの褪(あ)せた金色の髪が揺れる。奥二重の瞼の奥、霞んだ青空のような瞳に映るのは、意味の読み取れない古代文字だった。

「だめだ」

今アウファトの持っている知識では、壁に刻まれた言葉の全てを読み解くことはできなかった。

「そろそろ時間だ」

アウファトは無情に響く声の主を振り返り、縋るように名を呼んだ。

「ミシュア」

「諦めろ。また来年、出直しだ」
返ってきたのは静かな男の声だった。いつもならもっと明るいはずのミシュアの声は、珍しく落ち着いたものだった。長い行程の疲れだけではない。ミシュアの宝石のような青緑色の瞳には、いつもなら見せない落胆が滲んでいた。
このまま手ぶらで帰るわけにはいかない。アウファトは急いで手帳に壁の文字を書き写す。せめて次に来るまでに、必ず解読すると心に決めた。
白い柩と呼ばれるかつての王都の遺跡は年に一度、竜王祭のこの時期だけ周囲を取り巻く白い嵐が鎮まる。二人はその隙を突いて遺跡の南にあるリガトラ王国の王都から調査にやってきた。
「アウファト、時間だ」
アウファトは静かに奥歯を噛み、冷たい壁に手をつく。石の壁は、静かにアウファトを見下ろしている。途切れ途切れにしかわからない言葉。これがわからないものはここから先には進ませないと、無機質な壁は言葉もなくアウファトに告げていた。研究者の二人が一番見つけたかったものはお預けとなった。
リガトラ王国歴七〇八年、夏の終わり。首席研究員ミシュア、助手アウファトの単独調査隊は、白い柩の奥に新たな扉を発見した。

◇◇◇

リガトラ王国暦七〇九年、夏の終わり。日は暮れ、石造りの街並みは濃くなる夜の色に染まりつつあった。リガトラ王国の王都メイエヴァードの石の街並みは、夜が訪れてなお賑わいが絶えない。通りには金色の灯りを灯す露店が連なり、街の賑わいに花を添えている。
人で溢れる通りを、息を切らせて走る青年の姿があった。並ぶ露店には目もくれず、真っ直ぐに前だけ見て走る足取りに迷いはない。
奥二重の瞼の下、くすんだ淡い青の瞳は少年のように純粋な光を湛えていた。足取りに合わせて揺れる髪は顎の下辺りまでの長さで、灯りはじめた街の明かりが美しく照らす。美醜を言えば決して悪くはない顔立ちだが、本人は見た目には頓着がないようだった。髪は伸ばしっぱなし、公的な場に出ることがなければ髭も剃らない。現に今も顎や頬には無精髭が見える。平均より少し高い背丈と細身の体躯のせいでひょろりとした印象を受ける彼は、よれたシャツに座りじわの目立つ脚衣という服装も相俟って、冴えない優男といった風体だった。
街を颯爽と駆ける彼が飛び込んだのは、外にまで賑わいの漏れてくる酒場だった。夜の酒場は所狭しと人で溢れ返り、話し声と酒を求める声に満ちていた。
「いらっしゃい、アウファト。いつもの席は空けてあるよ」
カウンターの向こうにいる店主の声に、アウファトと呼ばれた男は手を挙げて挨拶をすると、店の奥の窓際にある半個室のような席に向かう。
数多の声で賑わう店の中、その席だけ店内から切り取られたかのように静かな空気が流れていた。少しばかり手狭なため好んで座るもののいない席は、ほとんど彼のための場所になっていた。

彼の名はアウファト・クイレム。歳は三十になる。くたびれた格好をしているが、国の機関で研究をしている学者である。アウファトはこの店の常連だった。
席についたアウファトのもとに、よく通る声で不躾な言葉が飛んできた。
「真面目だな。俺にばかり構ってないで、たまには女でも抱いたらどうだ」
それが自分に向けて放たれたであろうことはその声を聞けばわかった。アウファトは指先を髪に絡め、わずかに苛立ちを滲ませてくすんだ青の瞳を声の主に向けた。
「そういう気分じゃない」
低く唸るように声を上げたアウファトは俯きがちな顔を持ち上げ、眉を寄せて声の主を睨んだ。
「よお、首席殿」
アウファトの苛立ちなどどこ吹く風で、男は悪びれた様子もなく右手を挙げ挨拶をした。アウファトの視線の先、声の主は青と緑を混ぜた綺麗な色の瞳を持った美しい男だった。頬の辺りまでの長さの灰色がかった淡い茶色の髪は、襟足だけ肩のあたりまで伸びている。少年のような幼さの残る顔立ちのせいか、アウファトよりも少し若く見える。
不躾な物言いはいつものことだった。いちいち腹を立てている方が時間の無駄だとさすがに学習したが、毎回手を変え品を変え揶揄ってくる男に、アウファトはいつも振り回されていた。
「酒場にいる時点で十分不真面目だろ、ミシュア」
ミシュアと呼ばれた男は笑みを浮かべてアウファトの正面に座り、宝石のように澄んだ瞳を真っ直ぐにアウファトに向ける。

「なんだよ、ご機嫌斜めだな。酒は飲んでないのか？」
張りのある声は若々しく、アウファトに対して遠慮は見えない。ミシュアはアウファトの古い馴染みだった。アウファトとは学者仲間であり、先輩で師匠でもあった。
年齢よりも若く見えるミシュアだが、アウファトよりも五つ年上だ。
ご機嫌斜めなのはお前のせいだと言ってやりたいのを堪えて、アウファトは静かな声で応えた。
「飲んでない。今来たところだ」
アウファトを見て薄く笑うと、ミシュアは店内を忙しなく駆け回る店員に声をかけた。
「すまない、酒をくれ。一番うまいやつ」
「お茶も」
「あいよ」
アウファトもミシュアに続いてお茶を頼んだ。
「で、何があったんだ？」
きらめく青緑色の瞳は真っ直ぐにアウファトに向く。少年のように無垢な期待に満ちた視線に若干気圧されながらも、勿体ぶる話でもないのでアウファトは本題を切り出した。
「白い柩の単独調査が決まった」
アウファトの抑揚の少ない声に、ミシュアはその瞳が零れそうなくらい目を見開いた。こころなしか頬も赤みが差している。アウファトが口にした言葉は、ミシュアを高揚させるのには十分なもののようだった。

「はは、やったな」
ミシュアの表情に喜びの色が広がる。それは心からの喜びだと、アウファトから見てもわかった。
アウファトは考古学者である。学問の盛んなリガトラ王国において、王立研究所史学科首席研究員という肩書きをミシュアから引き継いで一年。史学科研究員の中で最も栄誉ある称号を戴いてはいるが、首席の名に相応しいと思える成果は未だ上がっていなかった。
語学を得意とするアウファトは大陸内の言語はほぼ習得している。しかし、遺跡調査という面ではその才を十分に発揮できていなかった。先任のミシュアから推薦され無理やり引き継がされたということもある。
民俗学者のミシュアはアウファトが考古学の道に足を踏み入れるきっかけとなった存在だった。長く務めた首席研究員を退いた今は王立研究所を出て個人で研究をしている。
アウファトのもとに国王から白い柩(ひつぎ)の単独調査の許可が下りたのが三日前のこと。調査に旅立つ前に挨拶をしようとミシュアを呼び出したのだった。
アウファトが向かう白い柩(ひつぎ)は、フィオディカ大陸にある古代の竜人の遺跡の中でも最大規模の遺跡で、かつての王都リウストラにあった王宮に当たる場所である。普段は氷雪に閉ざされ、夏の終わりの竜王祭の時期にしか人の進入を許さない。
フィオディカ大陸には春夏秋冬四つの季節がある。周囲の海流と風のお陰で一年を通して温暖ではあるが、季節の移り変わりとともに寒暖の差がある。夏の終わりは一年のうちでも一番気候が落ち着いて過ごしやすい季節である。

「はいお待たせ、お茶と、今日届いたばかりの果実酒だよ」
元気の良い女性の声とともに、飲み物が溢れんばかりに注がれたグラスがテーブルに置かれた。澄んだ赤茶色のお茶と、深みのある赤の果実酒が並ぶ。
この時期、酒場には様々な酒が入ってくる。果実から作られたもの、穀物から作られたもの、芋から作られたもの、醸造酒もあれば蒸留酒もあり、様々だった。ミシュアが頼んだ酒もその中のひとつだろう。二人は礼を言ってグラスを受け取ると、女性は笑みを残して去っていった。
「とりあえず、首席殿の単独調査の成功を祈って乾杯といこうか」
ミシュアが意気揚々とグラスを手に持った。
単独調査と言っても、二人一組で行う。過酷な環境の遺跡では、単独行動は死の危険がより高まる。安全を期すための仕組みである。普段はもっと大人数で行うそれを、研究員と助手の二人組で行う。難易度は上がるが、成果が出れば功績は大きい。
単独調査を行うには、実績と王の許可が要る。幸いにもアウファトは一年前の調査結果と壁の古竜文字の解読が功績として認められ、今回単独調査の許可が下りた。この国で考古学を志す者なら一度は夢見る、白い柩(ひつぎ)の調査。アウファトは一年ぶりにその機会を手にしたのだった。
「乾杯」
ミシュアが持ったグラスにアウファトがグラスを軽くぶつけ、涼やかな音が鳴る。
「行くのはお前と、助手くんか？」
「ああ」

ミシュアの言う助手くんとはアウファトの助手シエナのことだ。シエナはミシュアがいる時に研究員としてやってきて、それからずっとアウファトの助手をしている。ミシュアに似て民俗学をはじめとした幅広い知識を持つ、若いながら信頼のできる研究者だった。

期待にその美しい瞳を煌(きら)めかせるミシュアはテーブルに肘をつき、内緒話でもするようにその身を乗り出す。

「あれの解読もできたんだろう？」

ミシュアは笑みとともに少しだけ含みを持たせた声で言う。アウファトが一年前に解読しきれなかった古代文字、古竜文字のことだった。

一年前の竜王祭の季節。アウファトはミシュアの調査に助手として同行して、白い柩(ひつぎ)の奥にある白い揺籠の入り口に到達した。それまで白い柩(ひつぎ)の最奥部へ到達できたものはいなかった。白い柩(ひつぎ)の最奥部には白い揺籠が存在するとは言われていたが、場所まではわかっていなかった。そんな中、ミシュアは王の寝所に隠された部屋を見つけた。大きな発見だった。

そして、ミシュアが見つけた部屋には、その先に白い揺籠があるであろう壁があった。壁に刻まれていたのは、竜人族の使っていた古竜文字と呼ばれる古代文字だった。今の文字とは体系の違う文字で、幾何学模様のような規則性のある字体が特徴だった。

古竜文字は古竜語を書き記した古代文字で、大陸にある遺跡の大半で見ることができる。古竜語は竜人が竜王から賜(たまわ)った言葉だと言われ、現在公用語になっているアーディス語はこの古竜語から派生したものだと伝わっている。古竜語に関してはかつて栄えた竜人の中でも位の高いもの、より竜王に近いものが使った言語だとされている。

アウファトをはじめとする研究者の手によって解読は進んでいたが、当時の解読表とアウファトの知識だけでは壁に刻まれた古竜文字の解読には至らず、調査は時間切れとなった。

王都に戻って間も無く、ミシュアは首席研究員にアウファトを推薦し、その座から退いた。ミシュアは調査の失敗が原因ではないと言っていたが、アウファトにはそうは思えなかった。

調査の後、アウファトは書き写してきた古竜文字の解読を進めた。文字と口伝で残る言葉を照らし合わせ、そこから言葉と文字を一致させ、意味を探す。その繰り返しだった。各地の伝承を漁り、掻き集めた史料を日々睨んで、ようやくだった。

アウファトは紙に書き写してきた内容をミシュアに見せる。紙には古竜文字と現在使われているアーディス文字が並ぶ。

『我は善なるもの。忠誠と献身をもってこの扉を開ける。これは誓約である。これに背けばあらゆる責苦を、呪詛を受けよう。これは誓約である。この宝を護るという誓約である』

古竜文字を訳すとこんな意味になる。文中にある忠誠と献身、誓約と呪詛、そして守護。アウファトはずっと、この意味を考えていた。こんな謎解きめいたものは初めてだった。

似たような文章がないか、手がかりはないか、他の文献を探したが、アウファトが知り得る史料の中には何のきっかけも見つからなかった。

「宝を守る、ね」

ミシュアはアウファトから受け取った紙を見つめて、誰に言うでもなく呟き、果実酒を一口飲ん

だ。ミシュアにしては珍しい、もの静かな表情は何かを深く考えているようだった。
「大層立派なもんが眠ってるんだろうよ。見つかったら、少し分けてくれよ」
ミシュアはグラスを傾け、薄く笑ってそんな冗談を口にする。分けられるようなものが入っていれば良いが、とアウファトは思う。
幾度となく研究者たちが挑んだが誰も到達したことのない白い揺籠は、白き王の伝承にその記述がある。
――神の言葉を告げる黒き竜王に愛された王がいた。白き王。預言を受けた王は国を治め、やがて黒き竜王より至宝を賜った。その名はゼジニアといった。王に反旗を翻す者が現れると、王は自らの死を悟り、ゼジニアを白い揺籠に隠した――
王の賜った至宝とは、古代兵器だとか、金銀財宝だとか、数多の魔術書だとか、聖剣だとか、諸説あったが決定打になるものは見つかっていなかった。
「ちなみにこれ、音読はできるのか？」
もちろん出来るだろうと言いたげなミシュアの言葉に、アウファトは頷いた。お茶を一口飲んで喉を潤すと、静かに古竜語を読み上げた。
「ミア、セントレ、ネ。フィデ、デディ、ウム、ラドゥ、セト、アプラ。ラドゥア、ジュラム、ニア。ラドゥイ、イントラ、アル、ディオゾ、カスト、セブラ。ラドゥア、ジュラム、ニア。ラドゥ、トレゾ、アム、キア、ジュラム、ニア」
アウファトの声に迷いはない。古竜語も全て頭に入っていた。アウファトの声が途切れると、ミシュアは手を叩いて喜んだ。
「はは、やるな。流石は首席殿だ」
アウファトに渡された紙を指先で撫で、ミシュアは穏やかな声で続けた。
「まだ、白い揺籠には誰も到達できていない。俺もな。お前があの扉を開けられたら、それはお前の功績だよ、アウファト」
ミシュアは視線を持ち上げ、青緑の澄んだ瞳にアウファトを映した。その目は温かい。そう言ってもらえるのは素直に嬉しかった。アウファトにとって、ミシュアは戦友であり師匠だ。
あれから一年、アウファトはずっと気になっていた。あの時扉を開けていたらミシュアは辞めなかったかもしれない。もっと自分に知識があればとアウファトは思わずにはいられなかった。
思い出すと、なんとも言えない苦々しい気持ちになる。ミシュアはアウファトを責めることはしなかった。元々おおらかな性格のミシュアはアウファトの失敗にも寛大だったし、前向きだった。責められたことは一度もない。だからこそ、アウファトはずっとミシュアに対して申し訳ない気持ちを抱いていた。
「あんたの功績だよ」
思わず苦笑したアウファトの顔を、ミシュアは怪訝そうに覗き込む。
「なんだよ、嬉しくないのか？」
晴れない顔をしているアウファトを見て、ミシュアは不思議そうにしている。
「まだ気にしてるのか」

気にしない方がおかしいと思うアウファトだったが、ミシュアは済んだことは気にしない性格だ。自分なら三日三晩悩んで眠れないようなことも、ミシュアは大して問題にせず、よく寝た。眠れないなんて話も聞いたことがなかった。アウファトはいつもそれを羨ましく思っていた。

「俺はあんたの助手の方が合ってる」

「また何か言われたのか？　言わせておけ。それとも俺の目が節穴だと言いたいのか？」

ミシュアは背もたれに身体を預け、不敵に笑う。アウファトはそういうつもりで言ったのではなかった。首席研究員となると専用の宿舎、助手、研究費が与えられる。もちろん給料もある。なりたいものはごまんといるためやっかみも絶えない。なりたくないと言えば嘘になるが、実際なってみると苦労の連続だった。ミシュアはこんなことをずっとやっていたのかと思うと、アウファトはミシュアの精神力の強さに感服するばかりだった。

ミシュアには、竜人の血が流れている。見た目はアウファトと変わらないが、祖母にあたる人が竜人だという。

人よりもずっと賢く、優れた種族、竜人。かつてフィオディカ大陸に栄えた種族で、竜王の作った民だと言われている。角と翼と尾を持ち、尾と翼にある鱗は血統によって異なる色をしている。知力、魔力、体力、膂力に優れ、高い文明を築いていた。かつて人と竜人族との間に起きた争いによってその数は大きく減ったが、現在では大陸の北西部に都市があり、人と共存している。

竜人の声には魔力が込められているという。アウファトは信じているわけではないが、ミシュアと話すと元気になるのはそういうこともあるのかもしれないと思っていた。

「お前はできる奴だよ、アウファト。あの文字の解読もお前がやった。だから、胸を張っていい」

アウファトに言い聞かせるような声は穏やかで、そして力強かった。

「まあ、強いて言うならアムの解釈だな」

アムの解釈。思わせぶりな言葉を残してミシュアは席を立った。アウファトはミシュアの意図がわからないままその姿を目で追う。

「ご馳走さん」

グラスに残る果実酒を飲み干したミシュアがテーブルに金貨を置いた。酒代を払うにしては多すぎる。今日の支払いはせいぜい銀貨十枚かそこらの金額だ。

「ミシュア」

アウファトが金貨を押し返そうとするも、容易（たやす）く阻まれてしまう。呼びつけたのは自分だから、自分が払うつもりでいたのに。

「かっこつけさせろよ。先輩なんだから」

アウファトの物言いたげな視線を受け止めて、ミシュアは人好きのする笑みを浮かべる。

「今日は俺に出させろ。そのかわり、お前が帰ってきたら一番いい店で一番いい酒を奢ってくれ」

絶対帰ってこいというミシュアの激励だった。それにしても、一番いい店なんて行ったら金貨が何枚飛ぶことになるのかわからない。相変わらず無茶を言うミシュアにアウファトは思わず笑みを零した。

「期待してるよ、首席殿」

アウファトの肩を叩いたミシュアは足早に賑やかな店の入り口へと向かっていってしまう。その足取りは早く、引き留める暇もなかった。

結局ミシュアは金貨を置いて帰ってしまった。奢ってもらうつもりで呼んだわけではなかったのに。してやられた気分でアウファトはミシュアが置いていった金貨を眺める。こんなときもミシュアは先輩で、いつまで経ってもその背中は近づいてこない。

残ったお茶を飲み干し、アウファトも席を立った。カウンターにいた店員に金貨を渡すと、案の定多くの釣り銭の銀貨が返ってきた。

店を出たアウファトの目に映ったのは、たくさんの明かりに照らされる石造りの街並みだった。普段は灰色の街並みが、幾多の灯火によって明るく金色に照らされている。

この時期、多くの家が窓辺に蝋燭を置く。この地を守る竜王への感謝を表すためだ。窓には多くの灯りが灯り、金色の柔らかな光を夜の街に投げかける。

フィオディカ大陸では、今は竜王祭という古くから伝わる祭事の真っ最中だった。地域によって多少の差はあるが、だいたい夏の終わりに行われる。王都メイエヴァードでもそれは変わらない。

竜王祭は、この大陸を守護する竜王から預言を授かる祭事の名残だと言われている。神官が竜王のいる霊峰へ参じ預言を授かる儀式は失われて久しいが、多くの地域では未だ預言の返礼として捧げ物をする習慣が残っていた。今では返礼として捧げていた酒や食物が市場へ流れてくるようになった。商人の発案だと言われている。

街は夜になっても人の行き交う目抜通りをはじめ、どこの通りも賑わい、華やかな空気に包まれていた。竜王祭になると大きな通りには露店が連なり、各地から届いた品々が売買され、それを目当てにやってきた人々で溢れる。メイエヴァードは王のお膝元ということもあり、各地から名のある品が集められる。食料、織物、装飾品、そして酒。どれも普段はお目にかかることのできないものばかりだった。

アウファトは賑わう露店を横目に大通りを足早に抜け、家路を急いだ。

夏の終わりともなると、夜はうっすらと冷える。酒場の熱気の残る肌を撫でていく夜風は少しばかり冷たく、アウファトは羽織りものを持ってこなかったことを後悔した。出発の日は目前に迫っている。風邪でもひいたら目も当てられない。

焦燥感のような高揚感のような、普段なら嫌なはずの胸の高鳴りが心地好かった。

アウファトにはミシュアのように気高い血筋があるわけでもない。ただの人だ。伝承に憧れて田舎から出てきたような自分がどこまでやれるのか、楽しみであり、不安でもあった。それでも、淡い金の髪を揺らしながら人混みを縫って進む足取りは軽かった。

◇◇◇

アウファトの部屋に小さな荷物を持った研究員が血相を変えて駆け込んできたのは、調査へと旅立つ二日前のことだった。

「シエナが風邪？」

シエナはアウファトの助手として調査に同行する予定だった。風邪はすぐ治るだろうが、病み上がりの人間を連れて行くには白い柩の周りは過酷な環境だ。気候が落ち着くこの時期でも、運が悪ければ吹雪に遭うこともある。安全を考えれば休ませる方がいい。頼りになる助手がいないのは痛手ではあるが、命より優先するものはない。

「わかった。ゆっくり休むよう伝えてくれ」

「かしこまりました。アウファト様、シエナからこれを渡すようにと」

研究員から手渡されたのは小さな紙包みだった。ずしりと重みのあるそれは、アウファトが片手で持つには少々重かった。

「今回の資料だそうです」

言われて、アウファトは目を瞠る。これだけの量の資料をまとめるのは一日二日ではできない。この調査のために積み重ねられたシエナの努力に頭が下がる思いだった。

「ありがとう。シエナに礼を言っておいてくれるか」

「はい」

アウファトに一礼して、使いの研究員は部屋を出ていった。

今からシエナの代わりを探しては間に合わない。かといってこの機会を逃せば一年待つ羽目になる。少々荷物は重くなるが、アウファト一人でも行けなくはない。失敗すれば命を落とし、上手くいけば名声と実績が手に入る。何より、この調査でゼジニアが何を示す言葉かわかるかもしれない。それだけで、アウファトはこの無茶な行程に挑む価値はあると考えていた。

無論、感情だけで簡単に実現できるとは思っていない。アウファトは今しがた受け取った包みを開けた。蝋引きの紙の包みの中にはシエナがまとめた行程表、地図と経路、資料が入っていた。行程は距離と野営予定地まで詳細に記されていた。地図には注意すべき点が書き込まれて先人たちが残した情報を丁寧にまとめてあった。

白い柩を取り巻く白い嵐は人を拒む呪詛のようなものだ。これくらい準備しても、やりすぎということはない。

単独調査をひとりで行った前例が無いわけではない。道中で同伴者が怪我や病気で同行できなくなった場合や、稀にだが命を落としたという例もある。聞いたことがある限りでは、ミシュアもひとりでの調査経験はない。今回ばかりはミシュアに知恵を借りることもできそうになかった。

アウファトには、この研究しかない。功名心があるわけでもないアウファトは、ただこの研究が好きで続けていた。何より、幼い頃から焦がれ続けた秘密に手が届きそうなところまでやっと来られたのだ。もう目と鼻の先にあるそれを逃したくなかった。

シエナに託された資料に一通り目を通して、アウファトは受け取った包みを荷物の中に入れた。

◇◇◇

出発の日の朝は晴天だった。金色の朝日が街を照らす頃、宿舎の前に馬車が迎えにやって来た。単身で調査に旅立つのは初めてだった。

荷物を積み込み馬車に乗り込むと馬のいななきが聞こえ、程なくして馬車が走り出した。馬車は街道を走り、王都の北西にある城塞都市エンダールへ向かう。エンダールまでは馬車で丸一日かかる距離だ。

馬車の中でも、アウファトは資料に目を通した。地図を頭に入れ、行程を覚える。白い柩の近くでは、吹雪で地図など見ていられないからだ。

何度か休憩を挟み、エンダールの門にたどり着く頃には日が暮れようとしていた。

城塞都市エンダールは竜人の都市だ。神代の終わりに王都から連れ去られた竜人が集められた街が元だと言われている。集められ奴隷とされた竜人たちが解放された後、各地に身を潜めていた竜人たちが集まり、大きな街になった。

高い城壁に囲まれた都市は難攻不落とされ、人と和解が成立するまでの長い間、独立国家として栄えていた。そして今も、技術や魔術に長けた竜人たちによって様々な物が作られ、国中に流通してその恩恵がもたらされている。

アウファトを乗せた馬車はエンダールの門を抜け、街の中央の大きな通りを進むと石造りの建物の前に止まった。

白に近い灰色の石で作られた建物は、この街でも古くからある建物の一つだった。街の中央通りの奥にある由緒正しい老舗の宿、ヴィーエガルテンだ。調査でエンダールへやってきた時に使うのはたいていこの宿だった。国の機関の指定宿だけあって、店構えも内装も上品で、アウファトは気に入っていた。

手短に宿泊の手続きを済ませ荷物を運び込むと、アウファトは宿を出た。

日没の迫る頃、高い壁に囲まれた街にはあちこちに深い影が落ちている。家々にも灯りが灯り始める中、アウファトは馴染みの竜人の元へと向かった。

エンダールの北の果てにある、城のような大きな屋敷の前でアウファトは足を止める。ずいぶんと昔からあるらしい石造りの重厚な屋敷は、アウファトの馴染みの住まいだった。

入り口は大きな木の扉だ。付いている金具で軽く叩くと、仕立ての良い服を纏った、銀髪に青い瞳の物静かそうな男性の竜人が出てきた。

「これは、アウファト様」

穏やかな声色の彼はこの屋敷の執事で、アウファトの顔を見るなり深々とお辞儀をした。

「遅い時間に申し訳ありません。ティスタリオ卿はおいでですか」

「はい。ご案内します」

執事は嫌がる様子もなくにこやかにアウファトを迎え入れてくれた。

屋敷の内装は装飾の少ない質素なものだった。壁は石を組んで作られた壁がそのままになっていて、装飾品らしきものはほとんどなく、飾り立てる花もない。廊下には装飾の少ない燭台が並ぶ。とても領主の住まいとは思えない内装だが、それがここの主人の気質を表しているようで、アウファトは訪れるたびに好ましく思っていた。

アウファトを扉の前まで案内すると、執事の竜人は一礼して去っていく。木の扉を叩くと中から声がした。

「どうぞ」
アウファトは扉を静かに開ける。音もなく開いた扉の先は書斎のような部屋だった。夕闇の迫る部屋にはいくつもの金色の灯りが灯されて明るかった。金色の光はいずれも輝く鉱石が箱状の燭台に入れられたものだ。壁には書物の詰まった本棚が設えられ、奥に窓がある。窓の前には、入り口に向き合うかたちで執務机が置かれていた。
「お久しぶりです、ティスタリオ卿」
アウファトは屋敷の主人の名を呼んだ。机には数多の書物が積み上げられ、その間から顔を出したのは二本の金色の角を持つ竜人の男だった。エンダールは竜人の都市、この都市をまとめるものもまた竜人だ。髪は淡い金色で、瞳は澄んだ青、精悍な顔立ちをしている。見た目の年齢はアウファトと大して変わらないが、アウファトの十倍は生きている。
ウィルマルト・ティスタリオ。リガトラ王国においては王と並ぶ位を持つが、学者肌のウィルマルトは権力には興味はないようで、政治がらみのことはついでにやっているようなところがある。ここにはいないが腕の立つ宰相もいて、二人でこのエンダール周辺をはじめとするフィオディカ大陸の北部を治めている。
「久しぶりだな、アウファト」
ウィルマルトは嬉しそうに目を細めた。会うのは半年ぶりで、前に会ったときはミシュアも一緒だった。
「散らかっててすまないな。その辺に座ってくれ」

ウィルマルトに促され、アウファトは机の前に並ぶ応接用のソファへと掛けた。散らかっているのは執務机の周りだけで、応接用のテーブルは一応綺麗になっていた。
「見てくれ、俺の魔力を込めた石だ。これがあると、三日でもあの嵐の中にいられるぞ」
ソファの向かいへやってきたウィルマルトが楽しげに差し出したのは、うっすらと赤く輝く磨かれた鉱石だった。受け取ると、手のひらが温かい。角が取れて手に馴染むそれは人肌よりも少し温かく、伝わってくる熱は少しずつアウファトの身体に馴染んでいくようだった。
エンダール近くの鉱山で採掘される石は竜人との相性がいいらしく、多くの魔力を込められるのだと以前会った時に言われたのを思い出す。
失われた古代技術の復活を掲げている彼は、いずれこの城を飛ばすのだと言っていた。古代の竜人はそんなこともできたのだという。
「また行くのか、柩に」
アウファトを真っ直ぐに見据え、ウィルマルトは期待に満ちた目を向ける。彼もまた白い柩に興味を示すものの一人だった。
「ええ」
「お前も好きだねえ。ゼジニアか？」
ソファに深く掛けたウィルマルトは目を細める。
「はい。今回こそは」
「そうか、いい報告が聞けるのを楽しみにしてるよ」

学者肌のウィルマルトはアウファトたちの研究にも理解があり、積極的に協力してくれる。
「買い出しは終わったのか？　そろそろどこも店じまいだろ」
「これから、急いで行きます」
「ならこれを持って行け。試作品ばかりだが、何かの役には立つだろう」
ウィルマルトは机の上から取った試作品をアウファトの前に並べた。外套、ランタン、それから魔力が封じられた石。ウィルマルトは定期的に訪れるアウファトに試作品をくれる。店で買えばそれなりの金額になるものもある。もらって賄えるのはありがたかった。
「ありがとうございます」
「今回はひとりか。相棒は？」
「風邪で、俺だけです」
「なんだと」
目を見開き前のめりになったウィルマルトは、項垂れ盛大にため息をつく。
「同行すると言いたいところだが、宰相がうるさくてな。気をつけろよ」
どうやら同行したかったらしく、顔を上げたウィルマルトは苦笑いした。アウファトとしても竜人であるウィルマルトが同行してくれるのなら心強かったが、どうやら宰相から釘を刺されてしまったようだった。無理もない。ウィルマルトはエンダールの統治者だ。無闇に出掛けてその身に何かあっては困るからだろう。
「帰ってきたら、また話を聞かせてくれ」

街に残らなければならないウィルマルトは心底寂しそうに笑った。
名残惜しげなウィルマルトと別れ屋敷を出ると、辺りには夜の気配が近付いていた。アウファトは目抜き通りに向かい、店じまい前の道具屋に駆け込むと消耗品を補充した。
宿に着く頃には、ちょうど食事の時間になっていた。夕食を済ませ、荷物の整理をすると、アウファトは早々に寝台に上がった。四人泊まれる部屋に一人で泊まるのは申し訳ない気分だったが、この先はゆっくり休めるとは言えない。アウファトは柔らかな布団と滑らかなシーツの感触を確かめながら眠りについた。

◇◇◇

白い柩への行程一日目。夜明けとともに起き出したアウファトは荷物を背負い部屋を出た。夜が明けて間もない宿は静かだった。正面玄関へ降りると、すでに起きていた支配人が見送ってくれた。
青白く清涼な空気が早朝の街に降る。メイエヴァードよりも北にあるため、エンダールの朝は冷える。アウファトは外套を羽織り、小さく身震いした。
朝早いせいか、門を通る者はアウファト以外にいない。衛兵もどこか眠そうに門を出るアウファトを見送った。
ここから先は徒歩になる。白い柩までは街道に沿って歩いて二日。天候が荒れれば三日かかることもある。帰還予定は五日後。往復で四日、調査で一日の予定だ。

夜明けとともに晴天のエンダールを出発したアウファトは、北東に向けて伸びる街道を辿る。本来ならシエナが一緒にいるはずだった。話し相手がいないことに一抹の寂しさを感じながら、アウファトはひとり黙々と街道を進んだ。

アウファトが歩くのは、神代に作られた街道だ。王都と南の都市との貿易に使われた道で、商人や旅人など、多くの民が王都へ続くこの道を辿った。

荷馬車が二台すれ違ってもまだ余裕のある道幅の街道が、どこまでも続いている。四角く形の整えられた石が敷き詰められた石畳は、神代の竜人が作ったものだ。王都リウストラが滅びてから荒れ放題で所々欠けたり割れたりはあるが大部分は消えずに残っていることに、アウファトはここを通るたびに感動する。

街道の先には、背の高い木々が見え始めている。陽の高さから考えると予定よりも少し早く歩けているようで、安堵しながらアウファトは荷物を下ろした。シエナが調べておいてくれた休憩場所だった。行程表では、昼頃に樹氷の森へと差し掛かる見込みだ。

持ってきたパンを齧り、水分を摂って、アウファトは再び街道を進む。

やがて道の先には深い森が見えてきた。樹氷の森と呼ばれている森林地帯だった。白い柩を取り巻く白い嵐の影響で、夏以外は白く閉ざされ、樹氷に覆われる。普段は白く閉ざされた森が、この時期は本来の姿を取り戻す。氷雪が溶け、柔らかな湿度が深い緑の森を包んでいた。

まもなく、この森が凍りつく季節が再びやってくる。束の間の生きた緑の姿を眺めながら、アウファトは森を北東へと進んだ。

森を抜けると木々に阻まれていた視界が開け、肌を撫でる風の温度が下がった。

ここからは竜哭の平原である。白い柩の周囲に広がるこの平原は、かつて緑豊かな温暖な地だったということが周囲の遺跡や洞窟の壁画、伝承からわかっている。今見えているのは、その片鱗だ。

大陸の北の果てに聳える霊峰アンティウムから流れるいく筋もの川が作り出した広い平原。ここに栄えた王都リウストラを中心とする一帯は、神代の終わり、氷雪に閉ざされた。

古くから伝わるフィオディカ伝承にその記述が残っている。

――神は世界を等しく見守るために、七人の竜王を遣わせた。竜王は神の目となり手足となり、時に声となった。竜人は地上で人を見守り、人に知恵と文明を授けた。

世界には序列があった。神がいて、その下に神の代弁者である竜王、それに仕える神獣と竜、精霊が侍り、その下に竜人が並び、そして、人をはじめとする数多の命がいた。竜人は高い知能と高い魔力、高い身体能力、空を駆ける翼を持ち、その叡智は数多の技術としてこの大陸に文明と繁栄をもたらした。

竜人と人とをまとめたのは、白き王フィオディーク。竜王の声を聞く者、黒き竜王に愛されし者であった。フィオディークは悪しき王より民を解放し、竜人と人が共存する国を作った。この大地がフィオディカと呼ばれるようになったのは、フィオディークが名君として永くこの地を治めたからである。

永き安寧を壊したのは人だった。白き王へ反旗を翻した人は、竜人を蹂躙した。都は血に染まり、白き王は王宮の前で処刑された。首を落とされ、胸を裂かれ、惨たらしく壊された。

黒き竜王は白き王を悼み、地に降り立つと人に裁きを下した。しかし竜王は、王の心臓を奪った者によって殺された。黒き竜王を殺した剣は、奇しくも王の処刑に使われたものと同じ剣であった。白き王が神より賜った剣である。

黒き竜王は死に際、その槍を地に突き立て、呪詛を残して息絶えた。

神は嘆き悲しみ、雨を降らせた。やがて都は冷え、雨は雪へと変わった。黒き竜王の呪詛だといわれている。

都は昏く冷たく閉ざされ、あらゆるものを拒むようになった。神託を与える者は消え、神代は終わった――

フィオディカ伝承には、人の業が竜王の呪詛を呼びこの地を冷たく閉ざしたと伝えられている。

吹き荒れる風がこの地の終わりに鳴り響いた竜王の咆哮に似ていることから、いつからかこの地は竜哭の平原と呼ばれるようになった。竜人たちからは閉ざされた呪いの地と呼ばれ恐れられる。恐れないのはウィルマルトくらいだった。

白い柩を中心に、進入を拒むように渦を巻いて吹き荒れる吹雪がこの時期は止む。竜王祭のこの時期だけ気候が和らぐのは、竜王の残した呪詛が鎮まるからだと言われている。

雪は止んでも、依然として風は強いままだ。晴れ間こそ見えないが重い鈍色の雲は薄れて、うっすらとではあるが陽射しの暖かさを感じる。氷雪は解け出し、一帯は湿地となり背の低い草に覆われている。これもこの季節だけのものだ。

もうずっと長いこと、この地はこんな有様だった。少なくとも、アウファトが記録を紐解いた限りは、ずっとだ。

雪解けの水で泥濘む道は、お世辞にも歩きやすいとは言えない。アウファトは泥濘に足を取られないよう注意しながら、歯抜けの石畳が続く街道の跡を進む。膝下くらいの高さの背の低い草の生い茂る草原には鳥や小型の草食獣がいるようで、時折鳴き声が聞こえた。

薄曇りの空は明るいが、北に向かって徐々に暗くなっていた。色彩はあるが、草むらも空もどこかうっすらと沈んだ色合いをしている。

竜哭の平原に入ってしばらくすると、街道は真北に向かう。リウストラまでは一本道だ。アウファトは時折休みながら街道を進んだ。平原にはところどころ立ち枯れた木の残骸が残っている。凍結と融解を繰り返し、石は砕け、木々もまた土に還っていく。

北へ進めば進むほど夏の気配は薄れ、空気は徐々に熱を失っていく。空を覆う雲も増え、風は切り付けるような鋭さを帯び始める。

天候が落ち着く季節とはいえ安心はできない。雲越しに届くうっすらとした日差しの温もりはささやかなもので、吹き付ける風は容易く温もりを掻き消していく。

太陽も星空もあまり見えない竜哭の平原では、道標になるのは、足元の石畳と、先人が打ち込んだらしき朽ちかけた杭くらいだった。あとは地図と、方位磁針が頼りだ。

寒さは、ウィルマルトに貰った石がなんとか和らげてくれている。魔力が込められた暖かな石だ。明日も天候に恵まれるとは限らない。翌日に疲れを残さない程度に、アウファトは歩みを進めた。シエナの作ってくれた予定の道のりよりもずっと進めた。アウファトは日暮れ前に街道から少し

外れた丘に天幕を張り野営をした。
日が暮れると、気温は下がる。暖をとるための焚き火も、集めた枝が湿っていたせいか煙を吐くばかりだ。雲の多い空に星は見えない。アウファトは早々に眠りについた。思いの外疲れていたようで、途中で目覚めることもなくアウファトは夜明けを迎えた。
東の空が薄明かりに染まり始める頃、世界は耳の痛くなるような静寂に包まれていた。青白い薄明かりの中、アウファトは起き出した。行程二日目の始まりだった。
まだ夜の気配の残る丘の上で天幕を手早く片付ける。ひとり分の天幕は、片付けるのはさほど苦ではない。単純な骨組みと水を弾く生地で作られた簡単なつくりの天幕はあっという間に畳まれ、荷物の中にしまわれた。
仰いだ東の空は薄明るいが、北の空には厚く大きな雲が多く見える。今日は荒れるかもしれない。
アウファトは天候が大きく崩れないことを祈りながら荷物を背負い、丘を降りた。
二日目は、ひたすら街道を北に向かう。草地は徐々に枯れ始め、荒地といった方が相応しい有様で残雪も見え始める。白い枢（ひつぎ）へと近付いている証拠だ。
北へ進むにつれ、雲は厚くなり風の温度も下がる。そして、ついに雪が降り始めた。
アウファトの願いも虚しく、天候はたちまち悪くなった。
風雪は弱まる様子もなく、覚悟はしていたがこの時期にしては強い吹雪になった。それはまるで、白い揺籠を暴こうとするアウファトが王都へ近付くのを拒んでいるようにも思えた。
残りは真北へ向かうだけ。半日ほどの道のりだ。アウファトは地図をしまい、その手に方位磁針を握った。初めての調査の時にミシュアがくれたもので、調査には必ず持ってくるお守りのようなものだった。
唸（うな）りを上げて容赦無く体温を奪う風は、本当に竜王の咆哮のようだった。冷たい怒りは、体温とともに体力も奪っていく。吹き荒れる白い欠片は密度を増し、手にした磁針も朧げだった。
もはや道標となるものは何も見えず、足元にあるはずの石畳の感触も曖昧だった。時間の感覚は死に、視界は白く閉ざされた。方位まで見失えば、アウファトに残される道は死だけだ。体温を全て奪われてただの冷たい肉になる。背を冷たいものが這い上がり、アウファトは身震いした。
アウファトは厚い手袋越しの磁針の感触を確かめる。もはやこれだけがアウファトを導くものだった。
懐に入れてあるウィルマルトがくれた温かな石に触れて、折れそうな心を奮い立たせる。だが、石から手を離せば、指先からは温もりとともに感覚が薄れていく。容赦無く熱を奪う白い嵐は、すぐそこに死があることを咆哮とともにアウファトへと伝えた。
胸が恐れに染まり、アウファトの足が止まる。足先もひどく冷たい。進めと叱咤するが、動かそうとする足を風が押さえつける。それはまるでこれ以上来るなとでも言うようだった。
「くそ」
アウファトは小さく唸（うな）った。誰に向けるでもなく、自らに向けたものだった。進まなければ、死があるだけだ。なのに、その足は動かない。悲しいくらいに、前に進んではくれなかった。
「――ああ、困るよ。まだだめだ」

この緊迫した中、恐ろしく間延びした、澄んだ男の声がアウファトの耳に届いた。優しい声なのに、それは吹き荒れる風の音に掻き消されることもなくはっきりと聞こえた。
「は？」
アウファトは思わず声を上げた。その声すら風が掻き消していくのに。まるで直接頭の中に響いているように鮮明な、穏やかな男の声。幻聴などではない、吹き荒れる風の中でもはっきり聞こえる、すぐ隣にいるような声だった。周りに人の気配はない。ただ吹き荒れる白い嵐があるだけだ。
「君には、会わせたい子がいるのに」
何かが、磁針を握った手を掴んだ。アウファトは目を凝らす。何も見えないが、手のような気がする。それが手だと思うのは、うっすらと温もりがあるからだ。
「おいで。こちらだ」
その手からは明らかにアウファトをどこかに連れて行こうという意思が窺えた。つられるように足が動く。引きずられるようにして、アウファトは少しずつ歩みを進めた。
遺跡に幽霊が出るという噂はたびたび耳にするが、こんなところに幽霊が出るなんて話は聞いたことがなかったし、自分がそんなものに遭遇するとも思わなかった。
「はやく、目覚めさせてあげて。あの子もそれを待ってる」
何のことを言っているのかわからなかったが、不思議と恐怖はない。子どもを諭すような、優しく穏やかな声。一方的に聞こえてくるこの声に心当たりはなかった。
「あんたは、誰だ」

アウファトの問いに答えはない。
「今度はちゃんと、開けられるはずだよ」
アウファトは聞こえた言葉を反芻する。頭の中にあるのは一つだけ。白い揺籠のことだ。
「ゼジニア？」
白く塗りつぶされた視界に、振り返る人影と微笑みが見えた気がした。揺れる白い髪に、赤い瞳が細められ、笑った気配がした。それに、どういうわけか勇気付けられた。優しく手を引く何かに導かれるまま、アウファトは引き摺るように足を進める。
そうやってどれくらい進んだかわからない。不意に目の前が開けた。途端に手を引くものがなくなり、よろめいたアウファトは薄く雪の積もった石畳の上に転がった。
慌てて身体を起こし周りを見回すが、誰もいない。アウファトのそばには取り落とした磁針が転がっていた。
幻覚でも見たのだろうか。会わせたい子とは何なのか。今の声は誰だったのか。白い揺籠に関係のある、誰かなのか。アウファトを導いてくれた気配は、もう跡形もない。
釈然としないまま、アウファトは取り落とした磁針を拾い上げる。何はともあれ、白い嵐を越えたようだった。アウファトはもう一度辺りを見回す。
荒れ狂う吹雪を抜けてアウファトがたどり着いたのは、粉のような雪が積もった広場の入り口のようだった。広場の向こうには地吹雪に霞んだ王宮、白い柩（ひつぎ）が見える。吹く風に粉雪が舞い、アウファトの背丈よりもずっと高い氷の柱がひとつ墓標のように聳（そび）えていた。

王が処刑されたと言われる広場だった。
アウファトは静かに立ち上がった。目的地はすぐそこだ。深く息をして肺に冷えた空気を吸い込むと、頭が少し冴えた気がした。
白い広場を横切ると、アウファトは王宮へと足を踏み入れた。
石造りの王宮の中は外よりもずっと静かで暖かかった。白い石でできている内部は薄明るい。
寒さが和らいで緊張が緩んだのか、大きな欠伸が出た。アウファトは襲いくる眠気をなんとかやり過ごし、取り急ぎ外套と毛布にくるまって、王宮の隅で横になる。体力の限界だったのか、目を閉じるとすぐに意識は途切れた。
一眠りして目を覚ましたアウファトは伸びをひとつした。どれくらい眠っていたのかわからない。相変わらず薄明るい王宮の中は静かで、風の音も聞こえない。アウファトの立てる物音だけが大袈裟に響くばかりだ。身支度と簡単な食事をして、アウファトは過去の調査隊の残した地図を広げた。
一年前、ミシュアと進めた調査では王の寝所と、そこに隠された入り口までは見つけられた。アウファトは先人の足跡を辿り奥へと進む。音のない、時が止まったような空間に、アウファトの息遣いと足音だけが密やかに響いた。
白い石でできた王宮。白い柩（ひつぎ）と呼ばれるのは、ここにいた王が殺されたからだ。それを悼んで、残されたこの石の宮殿を柩（ひつぎ）と呼んだ。その奥に揺籠があるというのも妙な話だった。
長い廊下を進み、角を曲がり、アウファトは王の寝所へと辿り着く。
王の寝所は王宮の一番奥、玉座の間の裏にあたる。揺籠への入り口は部屋の玉座側の壁に隠されていた。石の板をずらすと現れる、大人一人が余裕を持って通り抜けられるくらいの階段。おそらくは竜人の体躯に合わせて作られているのだろう。翼の分も考えて作られているのか、人間のアウファトは余裕を持って通ることができた。
白い石の階段は光が届かない空間にあっても薄ぼんやりと明るく、竜人の魔力の込められたランタンのお蔭で視界は青白く明るく照らされている。
アウファトの足音が反響する階段はすぐに終わった。背丈の二倍ほどの深さを降りると、そこは一年前にやってきた空間だった。
あの日解読できなかった、古竜文字が刻まれた白い石の壁が見える。一年ぶりの対面だった。アウファトは手の震えをなんとか抑えつけるとランタンを足元に置き、荷物の中からボロボロの皮の手帳を出した。
アウファトは手帳を開くと、古竜語の翻訳を見ながら扉に刻まれた文字を読み上げる。
「我は、善なるもの。忠誠と、献身をもって、この扉を開ける。これは、誓約である。これに背けば、あらゆる責苦を、呪詛を受けよう。これは誓約である。この宝を護る、という、誓約である」
今使われている言語で読み上げたが、しばらく待ってみても何も起きない。
ミシュアの言っていたアムの解釈というのが気になった。
もう一度、アムの解釈を変えて読み上げるか。あるいは、古竜語で読み上げるか。時間はまだある。ひとつずつ試せばいい。アウファトは手帳のページをめくる。
手が震えていた。寒さからではない。また一歩、核心へと近付いたからだ。

国の歴史に名を刻むことになるかもしれない。しかし、それよりもずっと追い求めた秘密が、伝承の核心の一つであるゼジニアが、目の前にあって、その謎が解き明かされようとしている。

アウファトの研究者としての血が騒いでいた。喉が乾く。手先の冷たさも、もうわからない。心臓が脈打って、その音が耳の奥まで反響している。

追い求めたゼジニアがなんなのか、初めてこの目で見ることができる。

アウファトは古竜語の音読が書き記してあるページを開いた。

ここにあるのは古竜文字だ。一度、古竜語で読もうと思った。

「ミア、セントレ、ネ。フィデ、デディ、ウム、ラドゥ、セト、アプラ。ラドゥア、ジュラム、ニア。ラドゥイ、イントラ、アル、ディオゾ、カスト、セブラ。ラドゥア、ジュラム、ニア。ラドゥ、トレゾ、アム、キア、ジュラム、ニア」

古竜語は伝承や民謡の中に残されたものしか残っていない。かき集めて読み解いたこの言葉で合っていれば良いのだが。願いを込めてランタンを掲げ、アウファトは骨張った指先で壁面に刻まれた文字に触れた。

ふと、その下に並ぶ文字に気がつく。一年前には気がつかなかったその文字列に、アウファトはランタンを近付け目を凝らす。古竜文字で書かれているそれは、上に書かれたものよりも短い。

『ランダリムの名の下に』

訳するとそんな意味だ。ランダリムの花はこの大陸に広く自生している植物の名で、白く丸い花弁を五つつける、この大陸に住むものなら誰もが知っている花だ。この地を守護する竜王が神から証として賜った花だと言われている。

「ランダリム、ノーエ、セトゥエ」

知っている単語が連なっていたので、解読は容易だった。

ランダリムの名の下に誓約する。この先にあるものに竜王が関わっているのは間違いないだろう。思考に沈んだアウファトの意識を引き戻すように、壁の中央が縦に割れ、左右に開いた。

アウファトは顔を上げ、目を見開いた。

開いた石の扉の隙間からは、柔らかな光が溢れている。暗い部屋に溢れる、神々しさすら感じる白く優しい光にアウファトは息を呑んだ。心臓が跳ね、期待と不安で満ちた血を胸から全身に送り出していく。今まで誰も辿り着かなかった場所へ辿り着いたのだと、目の前の眩さを見つめて思う。

待ち望んだ歓喜の瞬間、思わず声が漏れた。

「ミシュア、やったぞ」

アウファトが開きかけの扉をそっと押すと、石の扉は奥に入り込み、ゆっくりと左右に開いていく。その動きは軽やかで、まるで重さなどないようだった。

今までの薄暗さが嘘のような、眩い光が溢れる。薄布越しの日差しのような、柔らかな光だった。

アウファトは目を眇め、静かに光の中へと踏み込んだ。

その先は明るく、いままでの寒さが嘘のように暖かい。春の陽だまりの中にいるようだった。白い揺籠の名に相応しい暖かな空間。床には白い花を咲かせる植物が敷き詰められている。ランダリムの花だった。

甘く清廉な香りの漂う部屋の中央。白い世界には不釣り合いにも思える、黒い何かがいた。
アウファトの目は黒い影に吸い寄せられた。
薄手の白い服を纏った身体を丸め、背には立派な漆黒の竜翼が折り畳まれている。身体を守るように丸めた黒い鱗に覆われた長い尾を持ち、少年とも青年ともとれる、目を閉じてなお美しい顔立ちをしている。流れるような美しい黒髪とともにあるのは黒い四本の角だ。頭の上側に緩く波打つ角が一対と、尖った耳の上には円を描くように曲がった長い角が一対。指先の爪は美しい漆黒だった。特徴から見て、竜人であるのは間違いなさそうだった。
アウファトは息を呑んだ。白き王が残したゼジニアは、美しい竜人だった。
「ん」
くぐもった小さな声が聞こえてアウファトの心臓が跳ねる。
「フィー？」
竜人が目を開け、身体を起こす。長く艶やかなまつ毛の下からは金色の瞳が覗いて、黄昏時の空のような瞳にアウファトの姿が映った。
「君は」
「き、み、わ？」
アウファトの呼びかけに澄んだ声が繰り返す。初めて聞くその声は、美しい響きでアウファトの鼓膜を優しく震わせた。
「あー……」

アウファトは頭を掻く。目を覚ました竜人は、声は出せるようだが、アウファトの言葉を理解できていないようだった。今の竜人が使うのはアーディス語。アウファトが使っている言語で、この大陸の公用語になっている。今の竜人とは使う言語が違うのだろうか。
黙り込むアウファトに竜人は首を傾げてしまった。他に思い当たるものといえば。
「ヤオ、ノーエ」
緊張と期待に声が震えた。アウファトが口にしたのは、あなたの名前は、という意味の古竜語だった。ミシュアやシエナと定期的に古竜語縛りの会話をしていたおかげで、日常的な会話くらいならこなせるが、通じるかは不安だった。
アウファトの問いかけに、竜人はゆっくりと瞬きをして、微笑んだ。
「ジェジーニア」
竜人が澄んだ声で答えた。どうやらジェジーニアという名のようだった。古竜語は通じるようで、アウファトはなんとか意思の疎通ができるということに安堵した。
見たところ、ジェジーニアはまだ若そうだった。見た目は二十かそこらのようだが、竜人は人よりも寿命が長い。見た目通りの年齢ではないだろう。白き王が死の前に彼を眠らせたのだとしたら、ジェジーニアはずいぶん長いことこうして眠っていたことになる。
「ミア、アウファト」
「アウファト」
アウファトの名を繰り返し、ジェジーニアは美しい金色の瞳を揺らして微笑んだ。穏やかな笑み

を浮かべるジェジーニアは突然襲いかかってくることはなさそうだった。
ジェジーニアがゆっくりと立ち上がる。背丈はアウファトよりも更に高く、体躯もしっかりしている。
「ミオ、スゥム」
ジェジーニアの発した言葉は私のつがい、とか、私の伴侶、という意味のものでアウファトは首を傾げた。
「スゥム……？」
彼とは初対面だ。彼のつがいに似ているのだろうか。そう思って、慌ててその考えを振り払う。そんなわけがない。彼も雄、自分も雄だ。それに、竜人は見目麗しいものが多い。比較するにしても、自分など足元にも及ばない。では何故と思っても、その答えは見つからない。
「アム」
それは、古竜語で守護を意味する言葉だった。しかし、その言葉の解釈はもう一つ存在する。アウファトが幼い頃に聞かされたその言葉は愛という意味だった。愛しいとか、すきとか、そんな意味の言葉だ。ここで、こんな状況で、そんな言葉が出てくる理由がわからないのに、アウファトの胸は高鳴る。
そんなはずがない。アウファトは野営をしてきたせいで無精髭だって生えている。とても一目惚れされるような容姿でもない。アウファトは混乱していた。
心臓がうるさく騒ぐ。動揺するアウファトはすぐそばまでやってきたジェジーニアにそっと手を

握られた。
「アウファト、アム、アム」
ジェジーニアは甘やかにその言葉を繰り返す。まるでアウファトを知っていてずっと待っていたようだった。ジェジーニアとは初対面だ。そのはずだ。
アウファトはジェジーニアの腕に抱きしめられる。その腕は優しく、温かい。間違いなく生きているものの温もりがあった。普段抱きしめられることなどほとんど無いアウファトの心臓が跳ね、胸が熱くなる。
アウファトを抱きしめたジェジーニアは嬉しそうに、歌うように高らかに喉を鳴らした。
腕の中に収まって、アウファトは考える。伝承の通りだとすれば、彼が黒き竜王から賜った王の至宝だ。こんなことがあるのだろうか。白い揺籠に眠っていたのは、ジェジーニアという名の竜人だった。それも、どういうわけかアウファトをつがいだと思っている節がある。
遺跡に生きた者が眠っているなど聞いたことがない。何か特殊な、それこそ竜人の魔術が施されていると考えるのが妥当だ。竜人は高い魔力を持っている。生きたものを長く眠らせておくこともできないことではないだろう。
「ジェジーニア」
ジェジーニアの力強い腕はしっかりとアウファトを捕まえて、少し身動ぎしたくらいでは解けそうにない。見上げると、自分の瞳を覗き込む美しい金の瞳が見えた。その美しさにアウファトは見惚れ、思わず息を呑む。ジェジーニアの双眸は黄昏時の西の空に似た、美しく深い金色だった。竜

人には何度も会っているが、こんなに美しい瞳をしている竜人は初めてだった。
「ヴィーデ、スキーノ、ウィーエラ」
冬の空の瞳。ジェジーニアの発した古竜語はそういう意味だ。自分の瞳は、そんな色だっただろうかと考える。薄い、くすんだ青の瞳をそんなふうに喩えられるのは初めてだった。
ジェジーニアの指先が、たどたどしく目元を撫でていく。
「アウファト、アム」
ジェジーニアはまた繰り返す。自分を映す瞳は熱を帯びていて、アウファトは居た堪れない気持ちになった。花の香りがする。足元に敷き詰められた花の香りが、少し濃くなった気がした。
長く眠っていたのなら、こんな見た目でも子どもである可能性はある。それなら、親と勘違いしているのかもしれない。そう思うと急に、守らなければという思いが頭を擡げる。
ここは冷たく閉ざされた地だ。かつてのような都ではない。命あるものがここで生きながらえることは難しいだろう。
彼を連れ出していいものだろうか。だが、置いていくのも気が引ける。
忠誠と献身という言葉がアウファトの脳裏をよぎった。彼を守るのなら連れ出すしかないのではないか。
「ヴェイエ」
アウファトがおいでと古竜語で伝えるとジェジーニアは微笑み、アウファトを抱きしめていた腕を解いた。

アウファトが差し出した手に、ジェジーニアはその大きな手のひらを重ね、しっかりと握った。温もりのある手だった。アウファトの胸に、彼を守ろうという気持ちが強く根付いた瞬間だった。
言葉も完全には通じないが、のんびりここに居続けることはできない。一人でここまで来るため、荷物を限界まで減らした。そのせいで食料は帰りの分が辛うじてあるくらいで、二人分となれば尚更だった。急いで帰ったほうが良さそうだ。
アウファトはジェジーニアの手を引いて部屋を出た。
「っ、う」
部屋を出た途端、ジェジーニアが驚いたように小さく声を上げた。
無理もなかった。ジェジーニアの服装は寝間着のような薄く簡素な丈の長いシャツのようなものに脚衣だけで、足元も裸足だ。部屋の外は屋外ほどではないが寒い。春の陽だまりから真冬の雪原にやってきたようなものだ。
「ああ、すまない、寒いよな。今着替えを出すから」
アウファトは急いで荷物の中から予備の防寒具と着替え、外套を取り出す。着せられるものは着せ、外套で包む。靴は、予備で持っていたアウファトのものを無理矢理履かせた。
ジェジーニアは身体が大きいので足も大きい。窮屈そうだが、ないよりはましだろう。予備がこんな形で役に立つとは思わなかった。
「アウファト、ティーケ」
ジェジーニアはありがとう、と言った。

「ジウィーナ」
柔らかく笑うジェジーニアに、どういたしまして、と返す。
アウファトは外套を被って不格好になったジェジーニアを連れて、白い揺籠を後にした。空になった白い揺籠は明るいまま、去りゆく主を見送っているようだった。

◇◇◇

ジェジーニアを連れて白い柩を出ると、吹き荒れていた風が止んで、白い石の街は耳の痛くなるような静寂に包まれていた。
空は変わらず暗い色の雲に覆われているが、ひとかけらの雪も落ちてくることはない。明るさから、まだ日の出ている時間のようだった。
アウファトが知る中で、この辺りがこんなに凪いだのを見るのは初めてだった。ジェジーニアを目覚めさせたことで何かが変わったのか、それともアウファトが知らないだけでたまにあることなのか、わからなかった。
アウファトは自分についてきているはずのジェジーニアの姿を探して振り返る。
ジェジーニアは王宮の入り口に立ち尽くし、空を仰いでいた。重い灰色の空をその目に映し、何を思うのか。ここはもう彼の知るリウストラではない。何もかも変わってしまった、誰もいない王都の残骸だ。

「フィー?」
ジェジーニアはぼんやりと空を見上げ、先ほども口にしたその言葉をまた呟いた。その声は白い吐息になって、霞のように空に消えていった。
天を仰ぐ姿はどこか悲しげで、アウファトの胸は痛む。かつての王都で起きたことを、彼を守ろうとした者たちの行く末を、ジェジーニアはまだ知らない。リウストラの最期を伝えないわけにはいかないだろう。だが、長い眠りから目覚めたばかりのジェジーニアにそれを伝えるのは酷なことに思えた。
「ジェジーニア」
アウファトが呼ぶと、アウファトの胸中など知らないジェジーニアは笑った。
ジェジーニアは外套を捲り上げ、その竜翼を大きく羽ばたかせた。
緩い風が巻き起こり、アウファトの髪を揺らす。竜人の羽ばたきを間近で見るのは初めてだった。
ジェジーニアの手がアウファトの腕を掴んで引いた。ジェジーニアの力は強く、アウファトは簡単に引き寄せられてしまう。
ジェジーニアは探索用の重い荷物を背負うアウファトを抱き上げた。痩せてはいるが、アウファトも大人の男だ。それを軽々と抱き上げるジェジーニアに、アウファトは驚きを隠せない。竜人の力を目の当たりにして、アウファトはただ惚けた顔でジェジーニアを見上げた。
アウファトの視線を受け止めたジェジーニアは微笑むと、その逞しい竜翼を大きく揺らし、アウファトを抱いて高く舞い上がった。

身体が浮き上がる感覚に、アウファトは思わずジェジーニアにしがみついた。ジェジーニアの温もりが伝わってくる。幻でもなく、目の前にいるのだとアウファトはその温もりで再確認する。ジェジーニアからは、あの部屋と同じく甘く清廉な花の香りがした。胸が痛み、心臓が震える。高いところが怖いわけでもないのに。

ジェジーニアが羽ばたくごとに黒い竜翼が風を起こし、あっという間にジェジーニアはリウストラの上空へと辿り着いた。地面はもう遥か下にある。足下にはリウストラと雪の残る湿原が見えた。見渡せば、一帯の吹雪が止んでいるのがわかる。

「あ！　あっちだ！」

アウファトが咄嗟に指差したのはエンダールの方角だった。ジェジーニアは小さく頷くと、羽ばたき、風に乗ってエンダールのある方角へと飛んだ。

ジェジーニアの翼は速かった。風を切る音とともに冷たい風が頬を撫でて髪を靡かせていく。

遺跡からエンダールまでは、まともに歩いて徒歩で二日ほどかかる距離だが、徒歩とは違い、瞬く間にエンダールの高い城壁が見えてきた。

ジェジーニアはまっすぐに前を見ている。アウファトはその美しい顔を見つめた。少年のような、青年のような、端正な顔立ち。竜人は綺麗な顔立ちのものが多いが、ジェジーニアは群を抜いているように思えた。金の瞳を縁取るのは長く艶やかな漆黒のまつ毛。鼻筋は綺麗に通っていて固く結ばれた唇は厚く弾力がありそうだった。

よそ見をしているうちに、エンダールはずいぶんと大きく見えるようになっていた。

「ジェジーニア」

アウファトが名を呼んで下を指差すと、ジェジーニアは速度を緩めると、ゆったりと高度を落とし、エンダールの門に程近い街道に舞い降りた。

ジェジーニアの足が地につくと、アウファトをそっと下ろしてくれた。

「ティーケ、ジェジーニア」

「ジウィーナ、アウファト」

礼を言うと、ジェジーニアは褒美をねだる子供のように擦り寄ってきた。

「ジェウ、ノッテ」

古竜語でいい子という意味だ。艶のある黒髪を撫でてやると、ジェジーニアは嬉しそうに微笑み、喉を柔らかく鳴らす。笑顔にはまだ子どものような無邪気さがあるせいで、自分よりも大きな相手ながら、アウファトも子どもの相手をするような気持ちになってしまう。

エンダール近くともなると、流石にもう防寒具は要らないくらいの気温だった。防寒具をしまい、念のためジェジーニアには外套を被せる。アウファトの知る竜人は二本の角を持っているが、ジェジーニアには四本ある。珍しいようだが、何か問題になっても困る。角は隠しておいた方が安全な気がした。

アウファトはジェジーニアを連れて街道を辿り、日暮れ前にはエンダールの門に到達した。

「止まれ」

門でアウファトを呼び止めたのは衛兵だった。

「研究者だ。リガトラ王立研究所、首席研究員アウファト・クイレム。宿はヴィーエガルテンをとっている」
懐から身分証と王からの委任状を出すと衛兵は敬礼をした。衛兵の視線は次いでジェジーニアに向けられた。
「そっちは」
「この先の村で雇った助手だ」
遺跡で拾った竜人と言うわけにはいかない。無用の問答は避けたかった。幸い、外套を被っているおかげで四本角は見えない。
「わかった。通れ」
衛兵はすんなりと二人を通してくれて、アウファトはジェジーニアを連れて無事に門をくぐることができた。
宿までは大きな通りを辿ればさほど時間は掛からなかった。
「おかえりなさいませ。お早いお戻りですね」
宿に辿り着いたアウファトを出迎えてくれたのは、ヴィーエガルテンの支配人だった。
「今日は、出発から何日目ですか」
調査の途中から時間の経過がわからなくなっていたアウファトは、支配人に尋ねた。どれくらい時間が経っているのか、確証が欲しかった。白い揺籠の中にはそんなに長くはいなかったはずだ。仮眠をとった時間を考えても出発から三日ほどだろうか。

立ち読みサンプルはここまで

「三日目です」
「三日……」
想定通りではあったが、アウファトは驚いていた。まさかこんなに早く戻ってこられるとは思っていなかった。
「お天気が良かったんですね」
事情を知らない支配人はにこやかにアウファトから荷物を受け取った。
「ええ、それと、彼のおかげです」
「そちらの方は」
「助手です。途中の村で雇いました」
「そうでしたか」
幸い、宿の主人からはそれ以上は追求されなかった。元々竜人はおおらかなものが多く、おかげで助けられることばかりだった。嘘をつくことに多少の罪悪感はあるが、大きな混乱は避けたかった。何せ、遺跡から連れてきた竜人だ。
「同室でいいので、泊めてもいいですか？」
「ええ、もとより四人分のお部屋としてお代をいただいております。構いませんよ」
「ありがとうございます」
言葉もわからないジェジーニアを放り出すわけにもいかない。なんとかジェジーニアを泊める許可も貰えて、アウファトは安堵した。